

## パネル発表「いきものとなかよし」

宮崎佳子

### 1 はじめに

本校は京都市北区にある児童数224名の学校である。本校では学校教育全体を通して、全校児童がウサギやチャボにかかわり、育てている。

一昨年に1羽いたウサギが老衰のため死んだ。子どもたちは、命の限り生きようとするそのウサギの姿を最期まで看取った。

「ウサギはもう飼わないの?」「このウサギ小屋、かわいそうだね。」淋しい思いをしている子どもたちの声に、昨年春、近くの小学校から生まれて2ヶ月足らずのウサギを3羽譲り受けた。名前は飼育委員会の児童が全校から募集し「ラビ」「チップ」「チャビ」と付けられた。チャボの雛も4羽かえり元気に育っている。

### 2 生き物と触れ合える環境作り

#### (1)常に子どもたちの目に触れる飼育小屋

飼育小屋は、子どもたちが登校する通用門の近くにあり毎日、飼育小屋の前を全児童が行き交う。

また、この場所は「いきいきランド」としてテニールや「おもしろ理科コーナー」、学級園などがあり子どもたちや保護者の方々の憩いの場にもなっている。



#### (2)飼育委員会

飼育委員会の活動は、チャボやウサギの毎日の世話のほか、年に数回、全校児童がウサギと触れ合える「ウサギと触れ合う会」を企画・運営している。中間休みや昼休みに飼育委員会の児童がウサギの抱き方や餌のやり方を説明し、一人一人の児童がウサギを抱いたりウサギに触れたりすることができる。飼育委員会の子どもたちの説明を真剣に聞き、とても大事そうにウサギに接している子どもたちの顔は、皆、やさしく輝いている。

#### (3)学習活動

1年生の生活科では京都市の指導計画にそって「ともだちいっぱい」や「おおきくなったねかわったね」の単元で生き物との関わりを深めている。

#### (4)フレンドリー活動

全校児童の縦割り活動を大切にし、異年齢集団の中で高学年としての自覚や皆で協力して得る成就感を育んできた。フレンドリー活動では以下のような活動を行っている。

「フレンドリー交流給食」「フレンドリー遠足」

「フレンドリー清掃活動(公園)」「フレンドリー当番(生き物の世話)」など

### 3 生活科学習—おおきくなったねかわったね(全11時間)—の中で

#### (1)単元のねらい(命に関わって)

身近な生き物に触れたり育てたりする活動を通して、生き物に親しみをもち命の大切さに気付く。

(2)気付きを深めるための活動の広がり・深まり  
生活科では活動の「広がり」「深まり」を大切にしている。そこで単元構想を「ふれる」「つかむ」「むかう」「生かす」の4ステージで構成している。

子どもたちが自分のめあてをもち、「ふしぎだな」「もっと知りたいな」「教えてほしい」と追究し始めた時、子どもたちのタイミングをみて「動物博士(獣医師)」にゲストティーチャーとして今年度も京都市獣医師会から3名の先生に来ていただいた。子どもたちの疑問に答えていただいた後、今までの体験活動をより深め、聴診器を使ってウサギの心臓の音を聞いたり、口の中や指先など、普段見ることのできないところを見せてもらったりして、どきどきしていること温かいことなどに気付き命を実感した。



### 4 フレンドリー活動として



夏休みなど長期休業中のウサギやチャボの世話は、フレンドリーグループで全校の児童が行っている。グループは1年生から6年生までの8~9人で構成されており、6年生がリーダーになり、協力して掃除や餌やりをしている。家庭から野菜を持ってくる子どもも多い。この体験を通して、子ども達は生き物の命を実感するとともに、生き物に親しみをもちて世話をしようとする心が育っている。卒業した中学生が時折訪れ、飼育小屋の様子を気にかけてくれるのもうれしい。

(京都市立大將軍小学校 教頭)